

国際社会学部

武内進一

Shinichi TAKEUCHI

国際関係コース／アフリカ地域

国際政治学



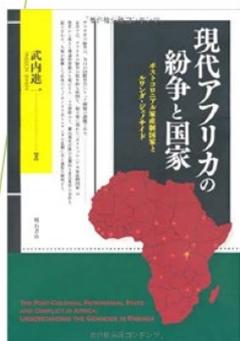
ガーナの街角にあるキオスク

地域の視点から国際政治を考える

私の専門は、アフリカ研究です。ルワンダ、ブルンジ、コンゴ民主共和国といった中部アフリカの国々を中心に、アフリカの政治や経済について勉強してきました。そのなかで強く感じてきたのは、アフリカで起こる現象がグローバルな政治経済と深く結びついていることです。紛争、開発、生物多様性など、アフリカをめぐる様々な課題があり、国連など国際社会が様々な取り組みを行っています。そうした取り組みに貢献するためには、国際社会の動きとアフリカの動きをともに理解することが必要です。アフリカ社会で人々が織りなす動き、国レベル、地域レベルの動き、そして国連などグローバルな動き、それらを可能な限り、つなげて考えることを心がけています。

研究紹介

1. アフリカの紛争研究：アフリカの紛争はどのような特質を持っているのか、ルワンダのジェノサイドはなぜ起こったのか、国際社会はアフリカの紛争にどう取り組んできたのか、といった問題意識で一連の研究を行ってきました。『現代アフリカの紛争と国家』（明石書店、2009年）や『戦争と平和の間』（アジア経済研究所、2008年）は、そうした研究の成果です。



2. アフリカの国家と土地：ルワンダやコンゴでは、農村での調査も行いました。ヨーロッパ植民地列強によって生み出されたアフリカの国家が、どのように社会を統治しているのかに関心があるからです。『現代アフリカの土地と権力』（アジア経済研究所、2017年）は、そうした研究の成果です。



3. 開発の歴史：最近では、国際開発の歴史に関心を持っています。持続的開発目標（SDGs）には「平和と公正」という目標が入っていますが、「平和」が開発目標に組み込まれるには、それなりの歴史が背後にあります。担当の国際政治概論「国際協力の史的展開」の講義でお話しています。

担当授業

- 国際政治概論「国際協力の史的展開」
- 国際協力論「アフリカの紛争と平和構築」
- 国際協力論演習「国際社会の思想と行動」
- 国際協力論卒論演習

関連する分野

- アフリカ地域研究
- 国際政治学
- 国際協力論
- 開発経済学

出版物

単著

- 『現代アフリカの紛争と国家』

編著

- 『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ アフリカからグローバル世界へ』（東京外国語大学出版会、2022年）
- *African Land Reform Under Economic Liberalisation - States, Chiefs, and Rural Communities*. Springer, 2021.
- 『紛争・対立・暴力—世界の地域から考える』岩波ジュニア新書、2016.

国際社会学部

「国際社会の思想と行動」ゼミ（国際協力論演習）

どのようなゼミか

このゼミでは、国際協力を切り口として、国際関係、特に発展途上国に関わる事象について学んでいきます。重要な文献を読み、仲間と議論しながら自分の考えを深め、卒業論文の課題を見つけることがゼミの主要な目的です。

国際協力は、援助、投資、貿易など様々な要素を含む国境を越えた現象です。主として、先進国と発展途上国の関係を念頭に置いた用語と言えるでしょう。



タンザニアの首都ダルエスサラームの町並み

しかし、今日、国際協力という言葉は、批判的に捉える必要があります。東京外国語大学に入学して、世界各地について勉強すれば、先進国と発展途上国という二分法がいかにも問題含みのものであるか、すぐに気がつくでしょう。

日本に住む私たちは、貧困や不

平等の問題が発展途上国だけのものではないことをよく知っています。実際に発展途上国と呼ばれる地域を訪れてみると、そこに我が国と同じように、貧しい人や豊かな人、様々な人々が暮らしていることがわかるでしょう。彼らは騒々しく活気に溢れ、私たちに多くのことを教えてくれます。



ルワンダ農村部の子どもたち

このゼミでは、国境を越えた人々の関わりについて、本を読みながら一緒に考えていきます。なぜ私たちは、外国の人々と関わりを持つのでしょうか。そうした関係は、いったいつから、なぜ、どんな風に形作られてきたのでしょうか。なぜ私たちは、アジアやアフリカの国々に援助をするのでしょうか。そうした援助は、相手国の人々の暮らしを豊かにしてきたのでしょうか。

国際協力や国際開発には、多くの場合、確立された正解というものはありません。正解を求めて、いろいろな人が知恵を出し合っているのが現状です。このゼミでも、世界の現状を前にして、皆で知恵を出し合っていきます。

私自身はアフリカ研究が専門ですが、様々な専攻地域のゼミ生がいます。異なる専攻地域の友人と互いに学び合うのは、東京外国語大学のとてもいいところです。



ウガンダの首都で見かけたケータイの広告

卒論のテーマ

- テクノロジーと社会—スマートシティを事例として
- 移民を通じて考えるフィリピンと日本の関係
- ビジネスと人権—中南米諸国に進出した日本企業を例として

ゼミで読んできた本

- 紀谷昌彦・山形辰史『私たちが国際協力する理由—人道と国益の向こう側』（日本評論社、2019年）
- デイヴィッド・ヒューム『貧しい人を助ける理由—遠くのあの子とあなたのつながり』（日本評論社、2017年）
- 伊藤亜聖『デジタル化する新興国—先進国を超えるか、監視社会の到来か』（中公新書、2020年）
- 末廣昭『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望』（名古屋大学出版会、2000年）
- ヴィジャイ・プラシャド（栗飯原文子訳）『褐色の世界史—第三世界とは何か』（水声社、2013年）
- などなど



セネガルのゴレ島。かつて奴隷がアメリカ大陸に向けて積み出された